

書評論文

書評

『オルジェイトゥ史—イランのモンゴル政権イル・ハン国の宮廷年代記』

井谷 鋼造*

Book Review : The Japanese Translation and Notes of the Persian Historical Source,
Tārīkh-i Ūljāytū (Ōljāytū) by Abū al-Qāsim Qāshānī in the 14th Century C.E.

ITANI Kozo*

カーシャーニー. 『オルジェイトゥ史—イランのモンゴル政権イル・ハン国の宮廷年代記』
大塚修・赤坂恒明・高木小苗・水上遼・渡部良子訳註, 名古屋大学出版会, 2022年,
カラー口絵4p, 目次・凡例・地図12p, 本文498p.

本書は、カラー口絵(5点, 4ページ分), 目次・凡例・地図(4点)(i-xii), 史料解題(1-28ページ), 訳註(29-440ページ), 資料(441-455ページ), 参考文献(457-474ページ), 訳者あとがき(475-478ページ), 図版一覧(479-480ページ), 索引(481-497ページ), 訳者紹介(498ページ)からなっている。本書の内容は扉ページに明記されるように「イランのモンゴル政権イル・ハン国の宮廷年代記」の日本語訳註であり, このような内容をもつ書物がこれまで出版されたことはない。その意味で本書が刊行されたことの意義はとてもの大きいと評価できる。以下, 評者が重要と思われる本書の特色や内容についての解説などを本書の史料解題から抜粋して引用してみよう。

- 1) 本訳註は, 刊本にではなく, 現存最古の手稿本に基づいた訳註を提示することにより, 学界に初めて『オルジェイトゥ史』を, できる限り正確な形で紹介する試みである。(p. 3)
- 2) 著者カーシャーニーは, 自らの職掌を歴史家, 算術家としている。(p. 4)
- 3) 『オルジェイトゥ史』は, オルジェイトゥの一代記であるものの, オルジェイトゥの宮

* 京都大学名誉教授, Professor Emeritus, Kyoto University

廷だけでなく、同時代のモンゴル帝国全体とその周辺地域の歴史を再構成する上で貴重な情報を含んでいる。(p. 11)

- 4) 14世紀前期におけるチャガタイ・ウルスと元朝、チャガタイ・ウルスとイル・ハン国の、それぞれの相互関係を知る上で、他史料には見られない独自の同時代情報が数多く含まれており…(以下略)(p. 11)
- 5) カーシャーニーが、自分こそが『集史』の真の著者であると主張し、ラシードを批判している記述である。(p. 14)
- 6) これに関連して、『集史』がオルジェイトゥに献呈された正確な献呈年月日まで記されている『オルジェイトゥ史』は、『集史』編纂の経緯を検討する上で、必要不可欠な史料となっている。(p. 14)
- 7) 『オルジェイトゥ史』のテキストの特徴は、読みやすい簡潔な文章と読みにくい技巧的な文章が混在している点である。(p. 19)
- 8) ペルシア語の翻刻に難があることに加えて、テュルク・モンゴル語起源の単語の読みにも難があるなど、テヘラン刊本には様々な問題があった。(p. 26)
- 9) 現存する2手稿本から学術的な校訂本を作成した。(p. 27)
- 10) 本書は、訳者たちが新しく作成した『オルジェイトゥ史』の校訂テキストに依拠した、全く新しい訳註である。(p. 28)

これらに加えて「訳者あとがき」の末尾には

- 11) 別途公表すべく準備を進めており、校訂テキストもあわせてご参照頂ければ幸いです。(p. 478)

という文言も添えられており、書評に当たっても完成しつつある(もしくは既に完成した)訳者たちによる校訂テキストの刊行が何よりも待ち望まれるが、今回は評者の手許にあり、上記8)にその概要が述べられているテヘラン刊本とのペルシア語原文対照により本書の書評を作成した。この刊本(略号はTUH)の書誌情報(再版?)は本書の457ページに載せられているが、内容構成は以下のとおりである。この刊本には本書421-440ページを占める頌詩は収録されていない。

Abū al-Qāsim ‘Abd Allāh b. Muḥammad al-Qāshānī, *Tārīkh-i Ūljāytū*, Mahīn Hamblī ed., Tih-rān, 1348. 目次と校訂者による緒言(11-19ページ), テキスト本文241ページ, 注記(243-252ページ), 術語解説と索引(253-283ページ), 参考文献(284-287ページ), 英文序言(8ページ).

本書評を作成するに当たって、評者は、上でも触れたように、まずテヘラン刊本(初版)の

ペルシア語原文を序文、オルジェイトゥ即位記、704年から716年まで年毎の記事、跋文の順で読み進め、答え合わせの形で、本書の訳註と対照しながら訳文を検討した。上記の8)に挙げたように、テヘラン刊本中の翻刻特にテュルク・モンゴル語起源の術語、及び地名・人名などについて多くの誤読や誤解、無知があることについては全文を読んだ評者も全く同感であり、なればこそ本書の翻訳グループによる、より信頼性の高いテキストの刊行が鶴首して待たれるとはいえ、現行のテヘラン刊本についても全く利用価値がないわけではないと考えている。この刊本もまた本書と同一のイスタンブル写本 (Aya Sofya 3019/3) を基にしたもので、欠陥が少なくないとはいえ、翻刻と校訂が恣意的で杜撰な形で行なわれたとは考えにくい。たとえば、テヘラン刊本の校訂者ハムブリー女史はこの刊本に付けたペルシア語緒言の中で、オルジェイトゥ史の内容に日誌のような部分があると述べている (16 ページ) が、これはこの史料の性格の一部を言い当てていると考えられ、またテヘラン刊本を基にテキストを読み進めても年代、日付、曜日などの記事について本書と顕著に相違する箇所は見当たらなかった。以下、本書の史料解題では特に強調されていないが、評者が注目した本訳書中の年月日・曜日記事の特徴、史料として利用する際に留意すべき点などについて述べてみたい。

本書には 67 ページから 414 ページまでに 204 箇所のヒジュラ暦による年月日が記された記事 (韻文中の日付、曜日を含む) がみられる。(最古の日付は 227 ページの「630 年シャウワール月 13 日土曜日」であり、最新の日付は 395-396 ページの「716 年ラマダーン月 27 日水曜日」、これはオルジェイトゥ死去の日付である。) これら 204 箇所には曜日が併記されているが、それらをユリウス太陽暦カレンダーに換算すると、曜日が合っている日付とそうでない日付が出てくる。評者による検討では上記の 204 箇所中 106 箇所 (評者による見落としの可能性のあることをお断りしたい) で曜日が合っている。¹⁾ ムスリムの曜日認識では金曜日の集団礼拝日を中心に 1 週間が繰り返され、閏年の有無にかかわらず全ての日付には機械的に繰り返される七曜の区別があるはずなので、曜日と日付が合わないことは著者による誤認、筆写人の誤記によるものか、または相違する情報源の記事を著者が改めて吟味・点検せずそのまま記入した、あるいは著者が利用したカレンダー上での何らかの齟齬や錯乱が生じていたことが原因である可能性が高いと考えざるをえない。

具体例を挙げてみよう。(以下のページ数は全て本書のページ数である。)

* 79 ページ 「703 年ズー・アルヒッジャ月中旬 [1304 年 7 月] 月曜日…」 これは本書の

1) 参考として、扱う時期が本書に先行するラシードウッディーンの『集史』ガザン・ハーン紀中の日付と曜日の記事を調査したところ、書評者の検討によると 114 箇所中 70 箇所の日付と曜日が一致することを確認した。Rashīd al-Dīn Faḍl Allāh Hamadānī, *Jāmi' al-Tawārīkh*, Jild 2, ed., Muhammad Rawshan-Muṣṭafā Mūsawī, Tīhrān, 1373. pp. 1206-1325. (以下では J T と略記する。) このうちにはガザンの生誕、即位、他界の日付が含まれているが、生誕と即位の日付はカレンダー上の曜日と合致しない。1206, 1261 ページ。

主人公たるイル・ハン、オルジェイトゥ即位の日付であるが、まず「中旬」と訳された原語はテキスト上で(منتصف)であり、これは満月の夜に始まる「中日」を意味し、「中旬」ではない。従って上記の日付は西暦では1304年7月19日の日曜日である。曜日が異なる理由は不明であるが、このような二度と繰り返されることのない重要事件の日付もしくは曜日の相違は、歴史家、算術家として宮廷に伺候し、諸事件に関する記録にも親しく関与・接近できたと推測される著者カーシャーニーの記録としては理解に苦しむところ。なお、本書では122, 123, 322 ページでも(منتصف)という原語を「中旬」と訳しているが、いずれも「中日」であり、月の満ち欠けに基づく完全な太陰暦であるヒジュラ暦では満月が昇った夜から翌日没までの1日であったことになる。

* 109-110 ページに6箇所近接した日付と曜日が出て来るが、110ページの「ラマダーン月2日月曜日」以外は日付とカレンダー上の曜日が相違する。109ページの「シャアバーン月7日木曜日」と110ページの「シャアバーン月8日水曜日」は1日違いで、曜日が逆行しているという点で、明らかな誤記かと思われる。

* 112 ページ(704年)「ズー・アルカアダ月8日月曜日」はオルジェイトゥ没後その後継者となる彼の皇子アブー・サイードが誕生した日付である。この日付の曜日はカレンダー上で水曜日となるが、アブー・サイード時代に完成した「普遍史」の代表作とされるハムドゥッラーフ・ムスタウフィー作『選史』によれば、同じ日付が「水曜日」とされている。²⁾より同時代に近い歴史書である本書と曜日が相違する理由は何であろうか。カーシャーニーまたは筆写人による誤解、誤記、あるいはムスタウフィーによる後の補訂などが可能性として考えられるが、真相は不明。

* 163 ページには7箇所近接した日付と曜日が出ており、うち5箇所は日付と曜日が一致する。しかし17行目の「第1ジュマダー月朔日日曜日」(一致)に対して2行下では「第1ジュマダー月5日金曜日」(不一致)及び8行下では「第1ジュマダー月16日木曜日」(不一致)となっており、日付もしくは曜日の認識に齟齬が生じていた可能性がある。本書中の曜日表示はペルシア語による原語で通常のshanba, yak-shanba, do-shanba, sih-shanba, chahār-shanba, panj-shanba, ādīnaであり、土曜日から木曜日までは語尾が同一なので数詞の有無や誤認などにより誤記が生じる可能性があるが、金曜日は他の曜日と綴りが異なり、筆写の際にも区別はさほど困難ではなかったと思われる。

2) Hamd Allāh Mustawfī Qazvīnī, *Tārīkh-i Guzīda*, ed., 'Abd al-Husayn Navā'ī, Tīhrān, 1362, p. 607. (以下ではTGと略記する。)

* 186 ページには 11 箇所もの日付と曜日が出て来るが、うち 7 箇所の日付と曜日が一致する。このページの脚注 13) 16) において日付と曜日の相違が取り上げられており、「シャウワール月 19 日水曜日」には脚注 16) で「ズー・アルヒッジャ月の誤りで、正しくは 1310 年 5 月 20 日であろう」とされているが、前後の日付がズー・アルヒッジャ月となっているので、妥当な推測であり、月名がズー・アルヒッジャなら曜日も一致する。

* 続く 187 ページにも 6 箇所の日付と曜日が出て来るが、全て一致していない。前ページの最末尾行の「第 1 ラビーウ月 7 日火曜日」から、このページの 13 行目「第 2 ラビーウ月 18 日日曜日」まではほぼ 40 日間の日誌的な記事であり、最初の日付が火曜日であれば、その後の曜日も同月 28 日まででは一致する。しかしカレンダー上「第 1 ラビーウ月 7 日」は金曜日なので、記録上以降の曜日に 3 日のずれ、さらに続く第 2 ラビーウ月に入ると、何故か 4 日のずれが生じてしまっているのである。

* 249-252 ページでは同じ事件を記録した日付と曜日が異なっている。この事件はオルジェイトゥ時代の有力なワズィール（宰相）であり、現在もイスファハーンの金曜マスジド内に彼自身が作らせた石膏製ミフラブ³⁾が残っているサーヒブ・サアド・アッディーン・サーワジーの失脚と処刑事件である。

248-249 ページでは日付が「711 年シャウワール月 10 日火曜日」とされるのに対して、250 ページの詩文中では「シャウワール月 11 日火曜日の夜」、252 ページの詩文中では「土曜日、シャウワール月 10 日の夕方の刻に」となっており、カレンダー上で日付と曜日が一致するのは 252 ページの日付である。この事件は上記ハムドゥッラーフ・ムスタウフィー作『選史』中でも著者ムスタウフィーの自作詩で年月日と曜日が記されており、「711 年シャウワール月 10 日土曜日」(1312. 2. 19.) となっている。⁴⁾ これはイル・ハン国宮廷内の文人行政官トップによる政権争いに絡む重要事件であり、著者カーシャーニーが本書中 119, 220, 257-259, 435 ページなどで熱烈な讃辞を送り続けている、後任となった宰相タージュ・アッディーン・アリーシャーの人事とも深く関係する事件だけに日付と曜日が一致しない箇所があるのは、異なる情報源による日付・曜日を吟味・点検せずにそのまま書写したか、あるいは著者の不覚としかいいようがないのであろうか。

3) この精巧かつ華麗で、オルジェイトゥ時代の工芸品として最高傑作とみなされるミフラブに残されたアラビア語の銘文について評者は原文、日本語訳、解説を発表している [井谷 2015: 57-58]。この銘文によれば、ミフラブの製作は 710 年サファル月 (1310 年 6 月 30 日 - 7 月 28 日) である。

4) T G, 608.

* 257 ページでは「ズー・アルヒッジャ月 4 日木曜日」, 「ズー・アルヒッジャ月 16 日木曜日」, 「ズー・アルヒッジャ月 22 日火曜日」という同月内の日付が出て来るが, いずれも日付と曜日がカレンダー上一致しない。日付もしくは曜日に誤認・誤記が生じた可能性がある。

* 262 ページと 271 ページにはシリアのアミールたちの到着という同一の事件が出て来るが, 262 ページでは「第 1 ラビーウ月 2 日土曜日」, 271 ページでは「第 1 ラビーウ月 2 日月曜日」となっており, 前者はカレンダー上の日付と曜日が一致する。

* 275 ページには 4 箇所の日付と曜日が出て来るが, 前 2 箇所はカレンダー上の日付と曜日が一致しない。「ズー・アルカアダ月 22 日月曜日」と「ズー・アルカアダ月 29 日水曜日」は日付が 1 週間違いなので同じ曜日となるはずだが, 前者は曜日が一致しない。同様の例は 364 ページにもみられる。

* 382 ページでは, 叛逆者の手に捕らわれていたイスマーイル・バハドルが到着した日付を「ズー・アルカアダ月 17 日月曜日」としているが, 同じ人物の到着は 306 ページでも述べられており, 日付は「ズー・アルカアダ月 7 日火曜日」となっている。7 日の場合, カレンダー上で土曜日, 17 日は火曜日である。2 つの日付を併せて, ズー・アルカアダ月 17 日火曜日とすれば日付と曜日が一致するが, これも誤認・誤記によるものといえるのであろうか。

* 395-396 ページの「716 年ラマダーン月 27 日水曜日」は本書の中で最も晚い日付, 曜日の記事であり, 本書の主人公オルジェイトゥ死去の日付であり, カレンダー上この日付は月曜日である。さらに 396 ページの詩文中では「716 年 dhīw (ذيو) の断食明けの金曜日の午後に」と別の日付になっており, 相違の原因は不明である。ハムドゥッラーフ・ムスタウフィー作『選史』では「シャウワール月朔日金曜日」となっており,⁵⁾ この日付と曜日はカレンダー上一致する。この日付・曜日の記事も上記のオルジェイトゥ即位や後継者アブー・サイド生誕の日付・曜日に勝るとも劣らない重要事件のそれであるにもかかわらず, 明確な一致がみられないのである。

以上, 評者が気の付いた本書中のいくつかの年月日・曜日記事について具体的に述べてみたが, 本書が『オルジェイトゥ史』と銘打った歴史書である以上, 諸事件の日付や曜日の記事が正確であってほしいと願うのは本書を史料として利用することを想定している評者のみではあ

5) T G, 610.

るまい。本書の史料解題中上記6)に引用したごとく、本書にラシード・アッディーンによる『集史』献呈の正確な日付・曜日が記されている(p.134)ことはモンゴル支配時代の歴史研究上で重要な意義を有することはいうまでもないが、その他本書中の全ての年月日・曜日の記事がそのまま無批判に利用できるとは限らないことは、評者が以上に挙げたいいくつかの例からも明らかなのではないであろうか。

ついでながら日付・曜日の記録についてテヘラン刊本では、164ページ「ラジャブ月25日」の後に「火曜日」の語が、318ページ「サファル月10日」の後には「金曜日」の語が入っているが、本書にはない。また91ページ2行目では(اولئ)の語を「ラジャブ月の始め」、288ページ2行目では(واخر)の語を「ラマダーン月の終わり」と訳しているが、前者は上旬、後者は下旬の意味である。

さらに今回は検討の対象としなかったが、本書の79、107、131、147ページでは十二支暦とテュルク・モンゴル暦による年月日が記され、89～165ページまでには11箇所でテュルク・モンゴル語の月名と日付、395-396ページにあるオルジェイトゥ死去の日付の直前には、十二支暦とテュルク・モンゴル暦月名のみが記されている。これらの日付についても検討・吟味が必要であろう。

以下ではページ順にペルシア語テキスト(テヘラン刊本による)と本書の翻訳を対照して読んだ評者の気にかかる翻訳上の問題点などを具体的に挙げてみたい。ページ数、本書での翻訳、テヘラン刊本の原文と()内にページ数、評者の試訳(下線部を付した)という形で提示する。

* 35ページ11-12行目「神の聖者たちを尊重する者、神の敵対者たちを辱める者」(معز اولياء الله منزل اعداء الله) (4) 著者による序文の中のオルジェイトゥについての修飾表現であり、(اولياء)の語は「聖者たち」の意味ではなく、「神に与する者を強化し、神に敵する者を辱める」を意味する並行表現であろう。

* 66ページ12行目「苛税や額外税の類のもの」(بدعت و رسوم محدث) (14) ガザンの遺言中の税負担軽減を述べた部分であり、(بدعت)は単なる苛税ではなく「違法税」、(رسوم محدث)は「新規課税」のことであろう。⁶⁾

* 79ページ22行目「意思と心は彼という広場に預けられて整備された。」(خواطر و ضمائر به ميلان او مرهون و متسوق آمده) (24) テヘラン刊本の注記34では原文は(ميدان)

6) ビドアが「違法税」であることについては、[井谷2023a:72,74,80]などの用例を参照。

のところを (ميلان) と読み替えている。この表現が出て来るのは703年のオルジェイトゥ即位に関する記事中であり、テキストとしてはむしろこの表現が適当ではないと思われる。直前には「貴賤皆々が王に対する祈願と称賛に言葉を合わせた。」という表現があり「彼らの心は彼への最眞に捕らわれ、調和した」という意味であろう。

* 80 ページ9-10行目「富める者に対しても貧しき者に対しても」(بر شريف و وضع) (24) 慣用表現で、「貴賤いづれにも」の意味である。

* 80 ページ17行目「マムルークの従者たち」(مستخدمان مملوك) (25) この原語ならば「マムルークの雇用者たち」の意味になるのではないか。

* 84 ページ20行目～85 ページ1行目「完全に世界中の人々の好みにあう形へと到らしめられた」
(به مذاق ساکنان آفاق على الاطلاق رسانيدند) (28) 「遠隔地の住人の味覚へも例外なく届けさせた」のような意味となるであろう。この文の目的語は「この歡喜の甘さ」である。

* 85 ページ9行目「望んだことを実行し目的を果たすために」
(با انجام آمل و حصول اغراض) (28) 「希望を叶え、望みを達した上で」各地の使節たちに「帰還の許可を与えた」という文意であろう。

* 109 ページ17行目、110 ページ15行目には「婚約の説教師」という訳語が出て来る。テキスト(42, 43)での原語はいずれも(خطب)であり、特に金曜集団礼拝時の説教師を意味するハティーブとは同語根であるが意味が異なる単語である。「(本人に代わって相手方に)求婚を行なう者」とするのが妥当ではないか。

* 112 ページ16-17行目「ハルワーンに対峙して逗留なさった。」原文では(محاذى باجروان) (44) であり、「バージャルワーンの向かいに」の意味となる。バージャルワーンは、ハムドゥウラーフ・ムスタウフィー作『心の寛ぎ』*Nuzbat al-Qulūb* によれば、「東経83度57分、北緯38度にあり、かつてムーガーンの主邑であったが、現在は荒廃している」と述べられている地名である。⁷⁾

7) Hamd Allāh Mustawfī Qazvīnī, *Nuzbat al-Qulūb* ed., Muḥammad Dabīr-Siyāqī, Tīhrān, 1336, pp. 103–104. Dorothea Krawulsky, *Irān - Das Reich der Īlhāne, Eine topographische-historische Studie*, Wiesbaden, 1978. SS.564–565.

* 118 ページ 12-14 行目「宝石で飾られた舶来の品々やタンスクでさらに満ちており、事績を語る逸話よりも楽しいのである。」

(به غراب مرصعات و تسوقات آگنده تر از روایای انار) (46) この部分のテキストには注記 54 が付されていて、手稿本の原文を読み替えている。(روایا) の語にはペルシア語で袋や外被といった意味があり、このテキストによると、「宝飾の珍品や舶来品によって石榴の外皮よりも中身が詰まっております」のような意味になる。これは 705 年にオルジェイトゥが異常な熱意をもって建設を開始した新首都スルターニーヤに設置された大市場の店舗群殷賑の様相を描写した表現であり、上記のような表現であっても不自然ではない。本書の「事績」に当たる原語は (انار) であろうと思われるが、テヘラン刊本は石榴と読んだのである。なお、この表現は後述 234 ページにも出て来るが、文脈が類似しており、同じ表現法であろう。

* 119 ページ 12 行目、220 ページ 8 行目に「彼の援助に榮譽あれ」というタージュ・アッディーン・アリーシャーへの讃辞が出て来る。原語は (عز نصره) であり、「彼の勝利が偉大なものであるように」の意味であろう。この文脈での (نصر) の語は「援助」よりも、「勝利、成功」の訳語がふさわしい。因みに評者が長年調査・研究している石板銘文上などでもこのような祈願文は通時的によく見られる。

* 150 ページ 23-24 行目「どうして、御自分の破滅と滅亡を、他の者たちの利益や成功を促すものにしようとしませんか。」

(چرا بوار و هلاکت خود را سبب تمشیت صلاح و مناجح دیگران باید کرد؟) (64) 「どうして自らの破滅を、他人の成功や改善を推進する原因としなければならないのか?」の意味か。これはオルジェイトゥの 706 年ギーラーン親征に際して、攻撃を受けたギーラーン側の君主ナウパードシャーに対して宰相のシャムス・アッディーン・ムハンマドシャーが降伏を勧める忠告の中で語られる言葉である。自らの破滅だけでなく、それが他者の成功や改善につながる行動を取らなければならない理由などない、という訓戒として語られたと考えられる。

* 150 ページ 27-28 行目「威信に満ち溢れ、涙を流す程の慈悲深さを見せ、過失を無くし、過ちを正すということは」

(حسن اعتبار و لطف استعبار و استنقالت عثرات و تمهید جرم زلات) (64) この文意は「反省を示し、落涙し、過失の赦しを乞い、罪科を償おうとする態度は」であると思われる。これも前記の宰相の言葉の続きであり、ナウパードシャーに降伏とオルジェイトゥ御前への出頭を促す言葉である。本書ではこの表現に「間違いなく、大きな影響を及ぼすはずだからです」という言葉が続く。(150 ページ末尾から 151 ページ冒頭)

* 152 ページ7行目「大変に僕思いの御方であります。」(غایت بنده نوازی باشد) (65) 「それは僕思いの極致となるでしょう。」と訳しうる。これは150ページの文脈の続きで、降伏してオルジェイトゥの御前に出頭したナウパードシャーが語った言葉末尾の表現である。直前には「もしも、罪人たちが犯した罪を記した書物に容赦と容認の書き込みをして下さるのであれば」という仮定構文が置かれている。

* 207 ページ14-15行目「来世の罪の処罰と問責」(عقوبت و مواخذت روز آخرت) (102) 「終末の日の問責と処罰」の意味か。オルジェイトゥのシーア改宗を述べていく過程でイスラーム史の概説を語る文脈で出て来る。

* 217 ページ「欲望にかられる魂の禁欲」(رياضت نفس جموع) (106) 「言うことを聞かない魂の訓練」これもオルジェイトゥのシーア改宗を述べる過程で出て来、イスラームの基本的なイバダート実践を解説する文章中に出て来る表現で、この部分の主語は(صيام)である。

* 227 ページ9行目「633年ラビーウ月」(در ربیع سنه ثلاث و ثلاثین و ستمانه) (112) 「月」を表わす単語は見えず、「633年春」の意味ではないか。

* 234 ページ3行目「支援と攻撃の歩みを進め」(خطوات انجاد و اغوار) (117) 「高地も低地もくまなく歩み」これは、710年の部分で述べられる、遠方へ苦難の旅を続け、莫大な富を獲得した末シーラーズで亡くなった豪商ジャマール・アッディーン・サワーミリーの生涯を紹介する中で用いられている表現であり、アラビア語の(نجد)「高地、ナジュド」と(غور)「低地、ガウル」の複数形を併置したものであろう。

* 234 ページ9-10行目「高価な真珠と貴重な珍品で、様々な事績を語る逸話よりも満たした。」

(به لالی ثمین و اعلاق نفیس آگنده تر از روایای انار) (117) 「高価な真珠と貴重な珍品でもって石榴の外皮よりも一杯に詰め込んだ」上述の故サワーミリーが各地を駆け巡って珍奇・高価な商品を集め、それによって莫大な財産を獲得したことを説明する文脈で出て来る表現であり、同様の表現は先述118ページにも見られる。「様々な事績を語る逸話よりも満たした。」では具体的な意味が曖昧であり、テヘラン刊本によるテキストの方が文意を理解し易いのではないか。

* 236 ページ6行目「才能の性質の根源のために」(از مبادی فطرت) (118) 「創造の始めから」これは710年にタブリーズで亡くなった学者クトブ・アッディーン・シーラーズィーについて

て語られる部分に見られる表現で、平たく言えば、「生まれてこのかた」という意味であろう。

* 236 ページ 16 行目「他の知識人たちの彼に対する関係は」(نسبت دیگر علما با او) (118)「彼に比べると他のウラマーたちは」「一つの真実も映さない鏡の表面であり」と後続する。これも上記クトブ・アッディーン・シーラーズィーについての表現である。

* 240 ページ 3, 7, 8, 11 行目に「蓄財」という訳語が見られるが、原語はいずれも (توفير) (121, 122) である。この語には「節約, 経費節減」という意味があり、この文脈ではこの意味で使用されているのではないか。この部分は711年にオルジェイトウの宮廷で先述のワズィール、サアド・アッディーン・サーワジールとタージュ・アッディーン・アリーシャーが財政運営の面に対立し、それが契機となって結果的にサアド・アッディーンが失脚・没落する一件を述べる記事であり、イル・ハン国宮廷の歴史上オルジェイトウの父アルゲン時代の683年サーヒブ・シャムスッディーン・ジュワイニー一族の処刑(本書361ページに関連記事が出て来る)以来度々起こった有力なイラン(ターズィーク)系行政官僚が公金横領の罪科を着せられて処罰され、失脚・没落するという事件の中でのことである。この場合、新興のアリーシャーは公費の節約, 経費削減【タウフィール】を謳って新規事業を受注し、その成果をオルジェイトウに提示して従来の宰相たちの財政運営が如何に冗漫で、無駄の多いものであり、結果として彼らは私腹を肥やし、裕福となったことを繰り返し非難して帝王を憤怒へ導くことで前任有力宰相の失脚・没落を画策し、代わって自らの地位向上を図るという結末に至るのである。因みに「蓄財」と併置される「未納」(240 ページ 7, 8 行目)は原語が (تقصير) であり、こちらは「(経費節減に伴う) 手抜き」のような意味ではないかと思われる。

* 280 ページ末尾行～281 ページ 1 行目「準備を整え機会を得ています」(منتظر و منتهزست) (147)「機会を窺っています」このようにすれば日本語の表現としてより分かり易いのではないか。

* 299 ページ 4-5 行目「あえて無益で無為な努力と尽力はせず、理性と正しさを持つ人の眼差しに赦され讃えるようにいたしましょう。」

(بضرورت جانب سعی و جهد مهمل و معطل نگذارم و در نظر حاکم عقل و عرف معذور و مشکور باشم)
(158)「止むなく(それを阻止する)努力はないがしるにせず、理性と慣習の裁決者の眼中で赦され、感謝される者となろう」これは713年の記事中に出て来るペルシア湾岸の海港ホルムズとキーシュ島の海上貿易の覇権をめぐる長年の紛争について述べた部分に出て来る表現であり、695年にかつてホルムズの支配者の妻のマムルークであったバハー・アッディーン・ア

ヤーズがホルムズを征服し、一時は彼を支援したキーシュ島の豪族マリク・ファフル・アッディーン・ティービーとの間で軍事衝突の危機が生じていたという場面でアヤーズの発した言葉の一部である。直前には「もし期待に反し、私を放逐せんとする企みを見るのであれば」という表現があり、ここで挙げた一人称発言の意味は、あえて挑発を受けている軍事衝突を辞せず、それは世人の眼から判断しても言い訳が立ち、むしろ感謝されることになろうということであろう。

* 301 ページ 5-6 行目「和約が成就するのは明らかなと懇願した。」

(التماس صلح كه معلوم نجح باشد ميگرد) (160) 「成功が疑いない和約を要望していた。」前掲の記事に続いてアヤーズとキーシュ島の支配者で、ファフル・アッディーン之父マリク・ジャマル・アッディーンが海戦を行なう場面での事前の交渉時にアヤーズが取った行動を示す表現である。

* 302 ページ 12 行目「相互に結びつき和約する協定の鎖は弱ったものの」

(سله عقد توصل و تصالح منبرم گشت) (161) 「相互和解の協定のカゴが固められた。」この部分でテヘラン刊本の (سله) 「カゴ」の語は本書の訳にあるように (سلسله) 「鎖」と改められるべきかもしれない。また、評者はこの文意を受けてテヘラン刊本の (منبرم) を (منبرم) と読み替えた。この場面は前述の海戦に勝利したアヤーズとマリク・ファフル・アッディーンの間で講和が行なわれた記事中である。「戦いと戦闘の綱は断ち切られた。」という表現が後続する。

* 310 ページ 2-4 行目「カラマン人とトゥルクマーン人が蜂起し、シリアとルームのウチュとコンヤ城市を征服し、そこに確固と居したと伝えた。」

(به استعلام خروج قرمانيان و ترکمانان اوجهای شام و روم و شهر قونیه گرفتن و متمکن درو نشستن)
(166) 「カラマン家とシャームとルームの辺境【ウジ】のトゥルクマーンが蜂起し、クーニヤの町を征服、そこに拠点を置いたことを知らせるために」これは 714 年の記事で、ルーム方面からの急使が伝えた内容である。ここに出て来る「ウジ」は 13-15 世紀のルーム地域で用いられたテュルク語の表現で異教徒支配地域との辺境を意味する。カラマン家は当時ルームで最有力のトゥルクマーン集団を率いていた一族であり、15 世紀後半に至るまでアナトリア中南部を拠点にオスマーン朝に抵抗を続けた政治勢力である。モンゴル時代にもカラマン朝は度々モンゴル支配に対して反抗し、その度に執拗な軍事的抑圧を受けていた。文意から見てカラマン家とトゥルクマーンが征服したのはコンヤの町だけで、「ウジ」は元来彼らの居住地を指していたから征服の必要や理由はなかった。この時代のルームの政治状況については、[井谷 2023b : 43-63] 参照。

* 311 ページ9行目詩文中「王子によりしっかりと支えられた王の中の王でありなさい」

(به شاه زاده شهنشاه باش پشت قوی) (166) 「王中の王よ、王子に対する力強い支えとなれ」

これは714年の大トイ(宴会)に参加したオルジェイトウの皇子アブー・サイドについて書かれた詩文中の表現であり、王中の王であるオルジェイトウが年少の皇子の強力な支えとなることを祈願した詩句である。因みに、このページの訳註13)でこの詩の韻律は「ムザーリウ」とあるが、評者の検討では、短長短長/短短長長/短長短長/短短長の順に音節が繰り返すムジュタツス韻である。

* 319 ページ9行目「彼らがガッザからエジプトの沙漠地帯の国境で玉座に到着した時」

(چون از غزه به سرحد رمل مصر به عرش رسیدند) (172) 「彼らがガッザからミスの沙漠の境界であるアリーシュに到着した時」 「玉座」と訳される原語は(عرش)だが、ここはエジプト国境の地名アリーシュ(العریش)の誤記か、異なる綴りとは考えられないであろうか。後続する文章からはマムルーク朝のスルターン・ナスイルはこの場所におらず、却って到着したアミールたちを捕縛してフスタートへ連行したことが判明する。

* 323 ページ22-23行目「じかに追求し、なすべきことをなすでしょう」

(به مشافهه استیجاب و استیظاب نمایم) (176) 「口頭で必要と思われることを示そう」

これは715年の記事で、オルジェイトウ側に降参した、ウゲデイ裔でカイドウの一族バーバー・オグルが無断でホラズム地方を攻撃して乱暴狼藉と激しい掠奪を働き、これに立腹したジョチ・ウルのウズベク・ハンが詰問使を派遣して語らせた言葉の末尾である。ウズベク側はオルジェイトウに対して強硬な姿勢で臨み、イル・ハン側のムーガン、アッラーンでの冬営(キシラミシ)の安全を保証しないとの脅迫を背景にバーバー・オグルの行動にオルジェイトウの関与があったのかどうかを問い質したのである。

* 337 ページ15行目「大気はそれについて温和な自然を思い描く。」

(هوایی به نسبت آن واهی طبیعت اعتدال) (183) 「空気はそれに比べると、温和な性質が劣る」これは715年の記事中で長々と記されるデリー・サルタナトの初期史に先立って北インドとその中心地であるデリー(دهلی)の風土を描写する部分での表現である。

* 338 ページ1-2行目「花園はその諸方[の土地]に対し点の園の瑞々しさを欠いている。」

(ریاضی بر اطرافش مقصور طراوت نعیم) (183) 「方々にある庭園は恵みある新鮮さに囲われて」デリーの風土についての上述直後の表現である。

* 346 ページ 1 行目「偽れ、さすれば偽りはその者にとって繁盛する商いになる」
(ونفاق فالنفاق له نفاق) (186) 「偽れ、商売とは彼にとって、所詮は偽善」これはアラビア語の格言で、デリーに新王朝を建てることになるハルジー（ハラジー）朝初代のマリク・フィールーズの「妬み深く敵対的な人間」としての性格を述べる場面で出て来る表現である。

* 346 ページ 18 行目「自分の地位を安定させ、兵士たちに対しては争いを退けた。」
(تسکین جائش و دفع پرخاش لشکریان را) (187) 「兵士たちの動揺を鎮め、争いを防止するために」これは前述のマリク・フィールーズがデリーの奴隷王朝のスルターンに召喚され、宮殿で病身のスルターンを殺害した後の状況を説明する文脈で出て来る表現である。(جائش)は「自分の地位」ではなく、(جائش)「心理的動揺」という意味をもつアラビア語の単語であろう。

* 348 ページ 18-19 行目「謙って様々な自己弁護をした。」
(تخلقات متخشعانه نمود) (188) 「わざとらしくへりくだった態度を見せた」これは前述のマリク・フィールーズが甥であるアラー・アッディーンと互いに軍を率いて戦闘が一触即発という状況下で会見した場面で出て来る表現である。この直後にアラー・アッディーンが部下にマリク・フィールーズを斬首させる場面が続いている。

* 360 ページ 3 行目「副官たちの中でも彼は、資産も技芸もない無知な者で、屠殺人の職からワズィール職に就いたのです。」

(چنانک از نواب او مجهولی بی مایه و هنر از جزارت به وزارت افتاده) (197)
「彼（ラシード）の副官たちの内には身代も技能もない、ひとりの名も無き屠殺人から宰相になった者がいるほどです。」これは715年の記事で、軍事衝突が起こっていたチャガタイ・ウルスとの国境であるホラーサーンに派遣された皇子アブー・サイードから金銭面での強力な援助を要請されたオルジェイトゥの宮廷で、実務に当たる2人の宰相、ラシード・アッディーンとアリーシャーが互いに費用を捻出するための責任を転嫁しようとして対立し、アリーシャーがラシードの収入調査を提案して実施され、ラシード・アッディーンは本人の管理する莫大な資産のみならず、息子たちや側近、副官たちのうちにも多額の財産をもつ者がいるとの事情が明らかになった場面でアリーシャーが申し立てた言葉の一部である。因みにラシード・アッディーンはこの時危うく助命されたが、オルジェイトゥ没後、アブー・サイード時代にアリーシャーとの対立の結果誹謗中傷にさらされて罷免され、718年第1ジュマダー月17日(1318. 7. 17)に息子たちと共に処刑された。⁸⁾

8) T G, 613.

* 361 ページ4行目～362 ページ7行目には「【タブリーズでの荒唐無稽な話】」という見出し以下715年の記事として「「我は、32年前タブリーズの広場で殉教者とされたサーヒブ、ヤフヤーの息子である」と主張した」人物の出現事件が述べられている。

(شخصی خروج کرد و دعوی که پسر صاحب سعید یحیی ام که از سی و دو سال باز او را در میدان تبریز شهید کرده بودند)
(197)「ある人物が現われ、自分は32年前にタブリーズの広場で処刑された、故サーヒブの息子ヤフヤーであると主張した。」このページの脚註186)では「いかなる事件であったのかは不明である。」とされているが、これはラシード・アッディーンの『集史』によれば、683年シャアバーン月4日月曜日(1284. 10. 16)とされるサーヒブ、シャムス・アッディーン・ジュワイニーの処刑事件⁹⁾に関連する出来事であることは疑いを容れない。オルジェイトゥ時代の上述サード・アッディーン・サーワジーやアブー・サイード時代のラシード・アッディーンなどの例があるように、イル・ハン国の宮廷では有力なイラン系官僚が君主への裏切りと公金横領による多額の蓄財を口実として失脚、没落、さらに処刑される事件が度々起こったが、ジュワイニー族の一件はその中でも時期が早く、最も有名なものである。ラシードの記事では、アルゲン時代にこの事件を主導したブカがサーヒブ・ジュワイニーの処刑後部下をタブリーズに送って彼の財産を差し押さえた後、「タブリーズの広場で息子のヤフヤーを処刑させた」となっている。この記事は、『オルジェイトゥ史』のこの部分に出て来るヤフヤーなる人物の主張と一致し、32年前とはいえ、住民の記憶に印象深く残っていたらしいサーヒブ・ジュワイニー族処刑事件を背景とした逸話であったことが判るのである。

* 371 ページ15行目「内面の苦痛の吐露の強調と確認が増加と一緒になり一致した」

(علاوه تاکید و تصدیق نفثة المصدور ملايم و موافق آمد) (204) 意識であるが、「吐いた唾そのままに虚偽でないことが確認された」の意味か。これは大元ウルスの大カアーンと対立関係に入ろうとしていた時期のチャガタイ・ウルスの支配者エセン・ブカの心境を説明した部分に出て来る表現である。直前には大カアーン側の有力武将トガチ丞相がエセン・ブカの使節に対して痛烈な罵声を浴びせ、イル・ハン国から大カアーンの許へ派遣された使者が帰途に立ち寄った際に東西からチャガタイ・ウルスを挟撃する計画があることを漏らしたことに對するエセン・ブカ側の反応を示す表現である。この後、東方を脅かされ、やむなく西方への領土拡大をもくろむエセン・ブカの方針に従い、弟ケペクと一族のイスールに率いられた軍勢のホラーサーン侵攻事件が詳しい経過と共に語られ、その一段落と共に本書末尾716年のオルジェイトゥ死去の記事へと続く。

9) JT, 1159-1160.

* 374 ページ 21 行目「従順の馬飾りを肩の上に」(غاشیه طاعت داری بر دوش) (206)「服従の鞍下布を肩に」ペルシア語で服従を示す際の慣用表現で(غاشیه)の語は「馬の鞍下に敷く覆い布」のことである。

* 380 ページ 15 行目「過去の攻撃は罪と遅延の状況を取り消し」(سورت پیشین ناسخ صورت تقصیر و تأخیر آید) (211) 意識であるが、「手抜きと手遅れの模様を呈する以前の章句を廃棄する」のような意味か。文中の語順を読み替えて解釈する必要があるが、(سورت)の語はここでは「攻撃」ではなく、イスラームの聖典『クルアーン』の章を意味する「スーラ」と読み、(نسخ)の語も同じく時代順に後の啓示は以前の啓示を廃棄することができるという『クルアーン』解釈学に由来する「廃棄者」という意味ではないか、というのが評者の意見である。これもチャガタイ・ウルスの支配者エセン・ブカの発言であり、上記のようにケベクとイスルをホラーサーン領へ侵攻させてみたものの、イスルはこの機会に乗じてイル・ハン国への服従の姿勢を見せ始め、エセン・ブカは戦略の見直しを迫られているという場面である。

* 383 ページ 4 行目「強奪し略奪し奪略した。」(نهب و غارت و تاراج کردند) (213) 原文中で多く見られる同義語反復の例であり、あえて各語を訳し分けず、全体として「何度も略奪した」でよいのではないか。

* 387 ページ 20 行目「それを嫌悪し忌み嫌うこともなかった。」(ملول و نفور نمی شد) (217)「疲労も嫌悪も感じなかった。」マーワラーアンナフルでチャガタイ・ウルスの追討軍と戦いながら、アム河沿岸へ到達したイスルの状況を示す表現である。

* 406 ページ 21 行目「狩猟以外には、帝王の足枷を壊すものはなく」(جز صید پای قید پادشاه نبساید) (231)「狩猟の時以外帝王の足を束縛するものもなく」テヘラン刊本の(بنساید)を(نبساید)「触れない」と読み替えて上記のように試訳した。狩猟時には不慮の危険に備えて足を束縛して敏捷に動くことが必要だが、その他の時間はそのような束縛も必要ないとの意味であろう。本書跋文中のオルジェイトゥの美德に関する表現である。

* 419 ページ 20 行目「[ラシードは] それのうち一つの分け前をも、かの書物の著者、編者、作者 [カーシャーニー] には与えなかった。」(دانگی از آن به مولف و جامع و مصنف آن کتاب نداد) (240)「そのうち 1 ダーングをもその本の著者には与えなかった。」[ダーング]の語意については 356 ページ脚註 167) に説明があるの

で、ダーングのままで意味は理解できるであろう。

以上、テヘラン刊本の原文と本書の訳文を対照して読んだ評者の立場から細かな表現の差違を含めて本書に出て来る年月日・曜日、さらに翻訳上の表現について気の付いたことを挙げた。¹⁰⁾ これらの例からも分かるように、『オルジェイトゥ史』には伝存する手稿本が事実上1点しかなく、その写本も本書の史料解題中6ページに挙げられる別作品の著者自筆本（ナスフ体）とは大きく異なる書体（ナスタアリーク体）で書かれ、全面的にテキストを確定するにはかなりの困難を伴うことが想定されることから史料自体が未定稿であった可能性が高い。手稿本テキストは写本の数が増えて多くの読者を獲得すればするほど内容が明晰で表現も洗練されたものになるであろうことは十分に予想されるところであり、そのような過程を経てこなかったらしい本書にはそれだけテキスト解釈上の難読・誤読箇所やカレンダー上の年月日・曜日の齟齬などの問題が多く存在するのは当然であろう。このような観点から本書の著者であるカーシャーニーの、自分こそが『集史』の真の著者であるとの主張も真偽を含めて再考する必要があると思われる。

本書には各ページに出て来る多くの人名、地名、文献名、その他の用語について、多数の詳細な訳註が付され、特にアラビア語の詩文や格言の引用、ペルシア語詩文については各詩文で使用される韻律名をはじめ、「本歌取り」という表現で引用元までが逐一注記されているのは、今後同様の翻訳を行なおうとする場合、注記の際には必須の条件となるであろう。本書のようなモンゴル帝国期のペルシア語史料が日本語訳（直訳体が少なくない）されたことは空前の快挙にほかならず、翻訳者の皆様のたゆまぬ努力に心からなる謝意を表したい。

10) 本稿の末尾で、実に細かい指摘で恐縮であるが、以下の3点を追加したい。

- 1) 本書の地名索引によれば、「アム川」は17箇所に出て来るが、地名として(أمویه)と表記される場合の他に「血のジャイフーン」(ジャイフーンの流れに比せられる大量の血涙の意味)のような形で表現される場合が2箇所(188, 397ページ)ある。地名として同じものを示すジャイフーンとアム川は訳語として分けた方がよいのではないか。さらに36, 198, 407ページでは「ディジラ川からジャイフーン川」「フラート川からジャイフーン川」のようなイル・ハン国東西の境界を示す表現が見られる。
- 2) (باغی)の語は原文中に頻出し、本書では一様に「叛逆者」と訳されているが、本来「イル」(服属者)の対義語であり、テュルク・モンゴル語起源語彙として提示し、本書流に「ヤギ」として「叛逆者」のルビを付ける表記がよいのではないか。
- 3) チャガタイ・ウルス系の「クトルグ・ホジャ」のような人名と「ハージャ・タージュ・アッディーン・アリーシャー」のような人名で用いられる「ホジャ」と「ハージャ」は原語では(خواجه)であり、全く同一表記である。一方を「ホジャ」(固有名詞の一部)他方を「ハージャ」(文人、文官の称号)と表記し分ける根拠があれば説明を入れてもよいのではないか。「ハージャ」khwājaの語は多義的であり、時代、地域によって特有の属性をもつ場合があることはよく知られている。同様の表記例で、地名として「ホラズム」が6箇所に出て来るが、いずれも原文では(خوارزم)であり、「ハーラズム」とカタカナ表記する選択肢もあろう。中央アジア系の地名や人名を「ホ」と表記するのに対してイラン内は「ハー」とするのは慣用によるのであろうが、本書が書かれた時には言語上でそのような発音上の区別がされていたという状況は考えにくい。凡例として冒頭で説明しておけば、表記上の違和感が緩和されるのではないか。

ただ一度今回の翻訳が刊行されただけで、『オルジェイトゥ史』の完璧な訳業が達成されたわけでないことはもとよりいうまでもなく、今後も本書の刊行を機に、日本語としての訳文がさらに洗練され、難読・誤読の部分がさらに解決・克服され、訳文の読み易さが向上し、さまざまな分野を専門とする読者の協力により本書の学術的価値がなお一層高まることを願ってやまない。

(初稿提出：2024年7月6日，最終稿の提出：2024年10月29日)

引用文献

- 井谷鋼造. 2015. 『アラビア文字碑刻銘文資料の精査に基づく西アジア史の研究』 科研成果報告書，課題番号：24520802.
- _____. 2023a. 「マスジドの壁面に残された勅令」『西南アジア研究』97: 51–84.
- _____. 2023b. 「ルーム・セルジューク朝，モンゴル支配，バイリク期のアナトリア」永田雄三編『山川セレクション トルコ史』山川出版社，3–96.